



中尾被淵源下

特別  
イ 4  
3163  
111(2)





貴  
14  
3163  
111(2)

中臣被淵源下卷

備前藤野保万波雅俊述

仁政章第四

本文乃有慢<sup>ミタレ</sup>經界之刑誅白人胡久美之惡<sup>カ</sup>母子不慈  
不孝及六畜之禁啓<sup>ヒ</sup>蟄等三災之戒<sup>ヒ</sup>故別<sup>ヒ</sup>為第四章

天津罪 登波 畔乎 放地 溝於 埋 樋於

あまつことハ 何をなすもろこそをうめむを

放地 敷蔭 串刺 生剥 逆剥

んかち志きこまきくーきーいけなきけりなき

許々太久 乃 罪 乎 天津罪 登波 法別 天



中臣被淵源下卷







子字 犯世道罪母 登子 登犯世道罪子 登母

子をたう劣るはとと子とあうせむしと子を

登犯世道罪

とあうせむしと

國ハ地くつハ助語ハ臣ハ人として人をそとふるもの  
とふ日類ちをハ彼世こもにつとるべきものを  
たうハ人の衣類を剥取る志のたうたうハ人  
賊室をこりして奪ふものこもハ人の名を  
美う出さこの業を侍りたうハ人の名を  
人に對して白人とふ上文よりして草野田間の法

かりたう人唐人なる事推て知る一たう人の死  
こたり社家白麻黒麻に附会一又近世物産  
人の事一仲哀天皇の記によまことと家こた  
うの死をそとす生のものたうハ盜賊之民を害する  
この是より一盗賊をまささハ民耕  
す事とすハ禁ちてけふ魚うハをのまらるるを  
たうせるはと是も又母子淫事の死立行相對の死ハ  
をそとるハ國つ罪ちまハ母をけむく父ををるハ  
起てまら玉風用所にはけしてふまの多一絶母之  
出佐日記のまらめおとこも是とふ日記ををる



かも一侍方といひ又和歌の題にも見初見有る書  
 たくむ考ふ一おぼきうけとおぼすといひて子の母  
 に不孝なるを初一とのまきう子とおぼんといひて  
 母の子にふ慈如事なる魚一又いふげと子とおぼる  
 はく子とまくとおぼるゆいと文をたくむにいて母  
 子とまかつてあるとあめせり○康誥曰矧惟不孝不友  
 弗祗服厥父事大傷厥考心于父不能字厥子乃疾其子于  
 弟弗念天顯乃弗克恭厥兄兄亦不念鞠子哀大不友  
 干弟二の語にてして上世質実の玉禁と初  
 魚一○舜典曰帝曰皋陶蠻夷猾夏冠賊姦究洿作

士五刑有服五服三就五流有宅五宅三居惟明克允○又  
 曰帝曰契百姓不親五品不遜汝為司徒敬敷五教在寬  
 畜於犯世苗罪昆虫乃災高津  
 ちくをとおうせるはくをふあ一のまきいふ高津  
 神乃災高津鳥乃災畜仆死虫益  
 神のまきいふたうつ鳥の災けものたふし  
 物世苗罪許々太父乃罪乎出天年  
 も初るはくをたくの川をたうたうてん  
 ちくをとおうせるも又上世よ畜類とすし  
 なといふ妄説を初一畜といふ家に初ふ



所の多敷之半馬鶴木の類をいふ人をむして後物を  
 電しむ事初のこと一孟軻齊の宣王につく  
 思禽獸に及るこのふとつて王たるに足れり  
 大神の清らる賢に尊し一て民におよむを  
 して物よおよむる孟軻の宣王に至る所半馬  
 鶴木人によりて生を尊しむ民用をなするを  
 そこちひそるはるるに律に日報畜産或傷を計  
 減價準盜賊是也けむ一の災以下三言造化鬼神  
 の用を借て小人を懲むその之其道至微至妙にして  
 實に測る處りるるものあり唯大神のこれと志

まるるをよむる今よりて二をを辨せ且つ三教書傳  
 立言のさを明し後來神學志流の妄説を正し  
 二尊大神の道固より堯舜に二つありは世傳又二  
 典三謨にむし一は實は今日人々に存し其跡を  
 あり百司百官のわろ所國之極之の初ふところ小民の  
 勤る所りまむらふ考あり故に別て一書とすけもの  
 たふし一すしものせむつと先又必禁之六畜の  
 ちる衆より山聖のをともむのおよぶるうくの  
 ことけものたふし一ハ獸を伴し一そらむとす  
 一そのきりとハ中一あるの事一むらう一ハ人のや



まひをいふまはよほしむい今の方のしん  
 けものに本ま鱈子ちんなとんまきくことくく  
 すと易曰中字ちん豚魚吉ま豚魚ちんかくとんま魚ちん  
 聖人の神ハ無智の鱈魚まくにあふといふ大祿の  
 内めぐとも又野山にまゆの麻糍中そのこーま  
 いふゆる天のこけけりのこけけとくれまのこけ  
 こてたくいおわくとんまきくまとんまとんまとんま  
 ありまをいふ  
 如此 出 天波  
 うくかーてい

さくの法令を定めて四方の民これによろこぶ  
 又下文を起す○文王視民如傷カといふこと下  
 文つ  
 まじらふこれをつ

神徳章第五

本文乃有宮中省視之語ナ蓋先華明彩照徹於六合之  
 淵源也故別為第五章ナ

天津宮事 卒 以 天 天津金木 卒 本

あまの宮事をとつてあまつらふ本を  
 折切末折断 且  
 うちきり来うらたなりて



あまつこやことハ宮中の五事之上位にふ所の  
 ことだまふ五事さうくかしてとりふるにうけて  
 ちくの事とあまつこの本をかうち切末うちた  
 とて金に彫不る本よきことたまふこあまつ宮事天  
 津金本よ天子のりちり下文に考ふ一〇六  
 月大被に天津宮事平以氏大中臣天津金本平本亦切  
 末亦断とありて大中臣といふ三字を加ふ小書に三字  
 を不讀とる大被といふことと正統のころ祭祀の為  
 に著作して古文にあらざる事にてして知る一  
 千坐乃 置坐 仁 置足 波之天

ちくろ乃たむろろにおたたらを一て

ちくろのたむろろハ神代中よいる所の子千坐置  
 戸トある一一即曰諸神歸罪過於素矣鳥尊而科之  
 以千坐置戸遂促彼兵至使拔髮以贖其罪亦拔其手足  
 之瓜贖之已而遂降焉ニ此を正統式よりて神代  
 の清罰をあらを人に幣物をとるゆゑの義と守故  
 に法家の伝ふか曰一〇案するにうの素表鳥尊  
 乃罪をた紀一たる所ちくろの垂戸とあまはちくろ  
 垂戸ハ帝王政事を聞一合す所ちくろ一は歴  
 ちくろ宮中の燕私外廷の政事御神徳の不息と



志る寸○詩云維天之命於穆不已大神の穆ムして不レ也  
 も亦うくのこことさるるにあまう金木をなうらさう  
 未うちたちりてちうらのおさうらうにホたたりり  
 てとあまの彼の成法を人言ホ彫玉木に刺キてカに  
サユウ 旌衣にホてホそをホなうらホふホ文勢をホらに  
 下文神糸サイカイ赤ハシの端をおこさう記者の業力カコ修コを  
 して幽ユウ玄ケンをふらう後人のおよそさう所之○書昌  
 在ミヤクシ璿璣玉衡トク齊七政○又案に良彘リョウシ曰良其背不獲其  
 身行其庭不見其人その背にホさうホするとホふ人の背  
 口腹コウブクのなき所は彼は身の由りて存するものこ

良する魚イサきにホまりては彼をおもホすホ在ホの  
 立タチ三ミころ視瞻シゼンの地之庭にホて人の不善フセンを不レ見  
 正マサ一ヒト来キにホうして不レ失シ之謂イヒ大神の躬止易カウシと相  
 似ニうら大神も人なり口腹コウブクなきにあうは又人に接セツせ  
 ざるにホすして人と大オホにホ美ミかおのホくホ神シめメに  
 神ホ一ヒトまたゆいんホんホ今イマふの神明なきにあうは  
 口腹コウブクのために其めをうホらホひ人に接セツするホ人の  
 不善フセンをホて人に傷ヤブらる神明は形カタ象ゾウの私シなき  
 りホに形カタちホるてもホなきホくホ天地チチとホ生ホ徳トクをホ配ホ  
 日月ニツゲツと其明を合アヒをホむこの故に幽暗ユウアンの地チとい



へともそ明不息ととく四海に及んでハ一草一本もさ  
さるものこ

天神地祇来格章第六

本文乃有制祭服作祝辞之語故別為第六章

天津菅曾 乎 本前立 未前切 互

のまつまうそとととさう利たち来くりきりて

八針 仁 取辟 天

屋川たりりにとりさいて

こま又書肆類干上帝標干六宗望干山川徧干群  
神の事之上文よりうけて神をまひらまひらと

神代卷曰天照大神方織神衣居齋服殿一書釋曰女  
尊云大神女体にして神衣を織たまふとあま  
ものろとあうす神衣をあうしめ亦織しあま  
天のすうそをわたりたち来くりきりて屋川り  
にそりさいてといふ神衣の事と神衣をうんそ  
刻寸論語に有明衣布この類にそく神衣をうんそ  
服を作る但し菅にて作らば此寸潔法をう  
ちり素衣為其法の地多く清くしと宣ふと  
同訓し屋川りといふ疎縫をいふさいていふ寸之縫  
に曰し



天津祝詞乃大祝詞乃事於宣礼如此宣 羅波  
 河海つ乃川とのふとのいとの事と<sup>は</sup>まかく乃らハ  
 乃いとハ神に告るると桑之祝詞祝辞淳詞とモ  
 書りふと乃川といふんて<sup>ハ</sup>正<sup>ニ</sup>甚<sup>ク</sup>式に多く<sup>ク</sup>こ<sup>ト</sup>  
 たりふと乃つとて別<sup>ニ</sup>美<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>守<sup>ル</sup>古<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>家<sup>ニ</sup>ハ八重の  
 傳あり<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>こ<sup>ト</sup>ハ一家の傳にして<sup>ハ</sup>ま<sup>ニ</sup>公<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ハ  
 宜の字上文よハ<sup>ニ</sup>桑<sup>ノ</sup>戒<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>祝<sup>ノ</sup>文<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>  
 て天地山川をま<sup>ニ</sup>り<sup>テ</sup>む<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>記<sup>ス</sup>ま<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>掌<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>の<sup>ニ</sup>祭<sup>ヲ</sup>か<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>  
 天津神者 天盤戸 於 押開 幾 天  
 阿まの川神ハあまの岩戸を<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>む<sup>ニ</sup>き<sup>テ</sup>あ<sup>リ</sup>免<sup>レ</sup>の

八重雲 牟 伊豆 乃牟別仁牟別天 所聞食 牟  
 屋一雲をいつのちまきに<sup>ハ</sup>ち<sup>マ</sup>き<sup>テ</sup>き<sup>ニ</sup>こ<sup>ト</sup>め<sup>ス</sup>ん  
 天つ神ハ天神之書類干上帝禮干六宗の事之蓋  
 渾沌<sup>こんとんいらい</sup>己<sup>ニ</sup>来<sup>ル</sup>の天神七世の先と<sup>シ</sup>ふ<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>天神を  
 あまの川の身<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>大神によりて<sup>ハ</sup>い<sup>テ</sup>る<sup>ハ</sup>あ<sup>め</sup>  
 の八重雲ハ別<sup>ニ</sup>美<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>ま<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>神<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>ま<sup>ニ</sup>つ<sup>テ</sup>  
 によりて<sup>ハ</sup>来<sup>ル</sup>格<sup>ヲ</sup>た<sup>マ</sup>ふ<sup>ル</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>ニ</sup>岩<sup>ノ</sup>戸<sup>ハ</sup>あ<sup>ま</sup>  
 のいとららに<sup>ハ</sup>同<sup>シ</sup>  
 国津神 波 高山 乃 末 短山 乃 末 仁  
 くまの川神ハた<sup>テ</sup>く<sup>テ</sup>屋<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>す<sup>レ</sup>流<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>末<sup>ノ</sup>子



登利坐天 高山乃伊惠理 短山

乃不り傳つたりましてたう屋や岐まのいいるるくくらら山  
乃伊惠理於 捨別且 所聞食牟

のいいるるををららききままけけてて茶ち二にめめささん

又書望干山川たいしやうめいせん編干辟神の事こと之の地ちのの神かみををままつつるるを  
ふふたたうう山さんハハ大たい山さん名な嶽たけ之の香か久く山さん以い傍ぼうのの類るいちちるるるる一  
ららうう山さんハハ小せう山さん丘きう峰ほう之の大たい和わ小せうむむらら山さんありありここれれをを  
いいふふ加か下げ一一ままはは清せいををままささきき事こと板いたににありありるるといいふふいいるるいい  
延喜式に伊總理いしげととままささききハハ穗ほのの字じ未み篇へんをを脱だつす  
といいるる二二説せつここももにに海うみたりたりともともここにに疑ぎをを闕くわてて可か

くく大たいややううののままをを一一天てん神かみハハ降くだりり地ち祇しハ  
ののかか交かう感かん一一てて慶さいををつつすすここ

如此所聞食 天波 罪 止 云罪 答 止 云

かくかく算さん一一絶ぜつ一一ててはは法ほふとといいふふつつとと空くうとといいふふ  
答波 不在 止

ここううハハああららししとと

天神地祖てんじんちそくく来き格かく一一毫ごもも福ふくなくなく万まん福ふく大  
神かみのの居い方かたににああつつままりり天てん下げをを深たかをを被おほふふささるるまま  
かか一一其その類るい文ぶん等どうのの及およぶぶききにに比ひすす法ほふこことといいふふららここ  
ここううとといいふふ然しかああららししといいふふ如ごとくく文ぶんにによよりりてて社しゃ家かにに



禊祓の儀とすのハ拾束之儀匠に文學の不及と云  
下文にケル迄一ノ物子と云て賀奉る乃と

神戸乃風乃 天乃八重雲 於吹放津事乃如久

志那との風天の屋一雲を吹た奈つる乃と

この匠ハ天つ神といふをケル返一歎美一と云

日本書紀級長津彦級長戸辺ハ風神ハ風の浮雲球

拂ふうとく

朝乃御霧 夕乃御霧 於朝風

阿一多のみきり由婦一の之成りを和知せ

夕風乃吹拂事乃如久

夕風の吹たうふこと知とく

世匠ケまつ神といふを操色一祢美一と云

霧ハ山川の薄氣ニハ涼之涼谷みよの豊のこ此

と一和風を嵐の山川を交よあるにた云

大津乃邊 仁居苗 大船乃 舳綱 解放

於わつ乃一にふる大み祢のこも法奈と云

地 艦綱 解放 巨 大海原 仁 押放津

ち登つ奈と云救ちて大海をうにを了と云

事乃如久 彼方 屋 繁木 加 本 字

こと知とくをちうとや志と云きりことと云







四臣奏功章第七

引て案の事<sup>ヲ</sup>を明<sup>ス</sup>す<sup>ル</sup>こと<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>大神のまつり<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>ぶ  
も又其事<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>鬼神<sup>ノ</sup>を祭<sup>ヒ</sup>て享<sup>ケ</sup>て慶<sup>ム</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>一</sup>  
天下<sup>ノ</sup>和<sup>平</sup>に<sup>一</sup>て一人の罪<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>一</sup>不<sup>義</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>ル</sup>こと<sup>ニ</sup>

本文乃有瀨織津比咩<sup>イレチ</sup>網言速秋津比咩<sup>チ</sup>氣吹戸主<sup>チ</sup>  
公種<sup>シキ</sup>德佐<sup>チ</sup>須良比咩<sup>チ</sup>加刑<sup>チ</sup>之<sup>チ</sup>語<sup>チ</sup>蓋<sup>チ</sup>弟<sup>チ</sup>二<sup>チ</sup>章<sup>チ</sup>所<sup>チ</sup>舉<sup>チ</sup>之<sup>チ</sup>賢<sup>チ</sup>  
也故別為<sup>ニ</sup>第七章<sup>ト</sup>

高山乃末短山乃末与利佐久良谷仁  
たう山の末清<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>屋<sup>ノ</sup>まの末<sup>ノ</sup>より<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>彦<sup>ノ</sup>  
落瀧津速川乃瀨仁坐須瀨織津比咩

落瀧つ速川の末にす<sup>一</sup>はす勢ありつ<sup>一</sup>むめ  
止云神

三ふ神

是より以下四臣<sup>ノ</sup>徳<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>種<sup>ク</sup>事<sup>ノ</sup>禹<sup>ノ</sup>皋<sup>ノ</sup>陶<sup>ノ</sup>益<sup>ノ</sup>稷<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>舜<sup>ノ</sup>  
にお<sup>ら</sup>る<sup>ル</sup>こと<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>易曰<sup>ニ</sup>王<sup>ノ</sup>臣<sup>ノ</sup>蹇<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>身<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>故<sup>也</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>一</sup>  
諸<sup>ノ</sup>扱<sup>ノ</sup>況<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>ル</sup>信<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>難<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>志<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>により<sup>て</sup>  
叙<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>り</sup>つ<sup>ル</sup>姓<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>名<sup>ニ</sup>よ<sup>り</sup>て<sup>一</sup>官<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>み<sup>ら</sup>り  
後世<sup>ノ</sup>長<sup>ク</sup>し<sup>テ</sup>の<sup>ル</sup>為<sup>ニ</sup>納<sup>言</sup>内<sup>辨</sup>考<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>官<sup>ヲ</sup>る<sup>ル</sup>一<sup>ニ</sup>  
王<sup>ノ</sup>命<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>入</sup>する<sup>ル</sup>こと<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>姓<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>一</sup>正<sup>ノ</sup>官<sup>ニ</sup>  
あ<sup>ら</sup>む<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>終<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>目<sup>付</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>ル</sup>ち<sup>ハ</sup>ひ<sup>る</sup>姓<sup>ハ</sup>目<sup>付</sup>の<sup>ル</sup>こ



三ノ下文に云る一ノたろ山の末よりウ山の末と云ふ  
の事といふことと云ふるに依ておちたきつ連川の  
濃子浦一まはるとハ大少の事一官にあつするいふ水  
の係名にあつするにたす政事とくく陳おり  
津姫によりてお入す

大海原仁持出 奈牟

如此持出 那波

於か海をくりにまあかゝあんのくまらあゝな  
大海原おやうみえ仁持ちやうてい出たそふ万川たぐせんの海は陽ひすることとく  
せかりつ姫一皮にあひめくちやうそ給奏す  
荒塩 乃塩乃八百道 乃八塩道 乃塩乃

あゝ一不の志母の屋をり社やゝゐあの一不の  
八百會 仁 坐 湏 速開都比咩登 云神

屋をゐる海一まはるや秋津姫といふ神  
持 可々 牟 吞 天 牟 如此 可々 牟 吞 豆 波 气 吹

そちる人乃んてんくく人乃んてはげふき  
戸 仁 坐 湏 氣 吹 戸 主 登 云 神 氣 吹

三に海一まはる氣吹戸主といふ神けふ  
放 豆 牟

左なるちりてん  
大なるなることと云ふにうけてあゝ一不のといふ



又を秋津神といふん松とてあはれ  
 一木の八万道の屋一木のつと詞をさるひて  
 秋津娘といふを珍利なるをさる一娘津娘  
 又人名にして官名は屋一曰事本紀伊弉諾伊弉册  
 尊生國竟更生神十柱先生大事忍男神次生石土毘古神  
 次生石泉比賣神次生大戸日別神次生天之吹上男神次  
 生大屋比古神次生風木津別之忍男神次生海神名天綿  
 津見神次生水戸神名速秋津彦神次生妹速秋津姫神後  
 速秋津彦速秋津姫二神因河海持別生神八柱志るまハ  
 この官伊弉諾伊弉册多法必を生きてあは時ほめて

番をさるゆらくと程正官神友あるとさるよはま  
 且ツ云々の時國家の事既に形のとて大神の居世に  
 ありて速秋津娘を吹戸主の官とさる事作  
 するに足まらう又たのく刻属を一一さるはたや毎つ  
 昨ハ瀬海を司るもの三公におりて目空之刻不浄と  
 洗ふ清むるを家とす人ハ屋の字のんてんハ伸の字  
 屋伸往來息の遊布するハ氣の盈宿のこ曰事本紀  
 に吹捨之氣為神是禰風神号曰彼長津彦神次  
 級長戸邊神この神吹たふ事をつ司る三公に  
 おりて司徒あり風を教を職るもの二臣五



化を種く幸風を以て二道を動り一遊を以て二  
道をあらしひ日夜船を主く幸か一三遊又鳥  
類も能なる魚一〇乃んて人日本書紀に祈の訓  
あまとも日訓子一て別家し

如此 氣吹放 且波 根国底国 仁 坐

一のく幸吹を形ちて一根の國底のくあま

頃 速左湏良比咩 登 云神 持左湏良比咩

ますんや法まらる娘と云神とらさる娘う

失 且年 如此失 且波 遺 礼苗 罪止

一あふひてん一のく失云多ハ法まらる法と

云罪 答止 云答波 不在物於止 被

云法とこりといふ神あく一そのをとを云

賜比 清賜 登 申事乃 由於 八百

孫日あよ免たまふと云事能よりとを云

萬神等 諸共仁

と海つの神たち法ともに

二位徳を種きあく一木の法ふことく風の

うこ子うことく畿内申云ををら云法め依

たらふあいまく一龍をさるものいさる娘まを

て刑を加一とまらる娘刑官之或ハ四夷に放流



一或ハ死刑に伏すきんら姫うーあひてんとこれ  
 從この官子も属官を丁一有らきんら姫と  
 不招の必底の國比事旧事本紀記素美益鳥尊曰汝  
 所行甚益頼故不可住於天上亦不可居<sup>レ</sup>苦原中国<sup>ニ</sup>宜<sup>ニ</sup>急  
 適於底根<sup>子</sup>之國こあまは實にみことりーに約ふ  
 うことりー又旧事本紀日本書紀とそるあま國一  
 任たまふ事を志りー神孫今に根の國といか  
 云云をいふりことりー又旧事本紀に考るに天上又ハ  
 比原中国より外に底根<sup>福</sup>の國といふとそたりた  
 を國といふこそのあまを約むも遠ふまを根

の國といふ出云を根の國といふハ等是又うの國に中  
 美和夷といふの類之志くれとも又おの川う日ー  
 うらに彼に夷といふい考りそけせまゆるのさあり  
 五れに根の國といふハ屬こそ考りーむのさこあ  
 考昔んらうのさかちの國といふ種ハこやこ之類に考  
 て田舎に根こ根ありて後に種あり神世の名義不  
 測<sup>ソリ</sup>の妙あり<sup>メウ</sup>学考ふくこれを案守丁一中文いふ  
 こころハ風水の官法を考けともいまこい<sup>レ</sup>能きさる  
 こものいさを由に懸るここまきすら姫の交まら  
 所こ○大禹謨曰三旬苗民<sup>ニ</sup>逆命<sup>ニ</sup>益贊<sup>ニ</sup>干<sup>ニ</sup>禹<sup>ニ</sup>惟德



勤天無遠弗届○又曰七旬有苗格○仲尼曰善人為邦  
百年亦可以勝殘去殺矣誠哉是言也

左男鹿乃八乃 耳 平振立 天 聞

ををーの屋つの沸をゆりたききー  
食 登 申 寿

めせと申壽

こまも又大をるむにたうまのちるに身よりたてき  
こーめせと馬ひき牽そとーのねせ月海口のとを  
て屋つの耳といふーるこそその疾きまをま  
床にいみけふーと徳家のうこうをむかうすまこ

社家よ麻い甚目大明神なりまふたこといふり  
非く回事本紀顯宗記曰脚ヒキ日本乃此傍山仁サホシカ牡鹿乃  
角ツノ拳サケ天吾舞ワレミウとみくさささーの角とつきたるこ  
八川の沸こ屋つハ天子の教之四方に四隅とま  
て八方あり中央チウウウウを天子と守板に九の敷の極之天  
子ハ位の極あり又皇極を九重といひ長にハ百た  
ぬ八十氏人といふ皇にハ偶ヤスミ一るといふ耳ハ八極七  
糸かと康階カシまーうく侍を志とさすいとの四聰を  
開くの事之まをすとすといふ事禮記齊戒シテテウス以告鬼神  
あるいせをろを神にや告るこ又曰侍坐君子若有



告者曰少間願有復也云々此の長をにやと云々と云  
 奉之論語復命曰實不顧兵云々の仲尼擯云々の主  
 國の君に擯一實退て後國君に告ぐる云々の所  
 まよすと云ふも復命之弟二章に天々云々の云々  
 一云云所の云々等成功を云々也○雅後謹案に  
 天照大神の帝徳は天地と云に寤りか一天兒屋命  
 志た一く奉仕して職に存一奉紀に云々たり明君  
 を補佐一巨萬の基云々を立一より孫氏人長の長  
 として皇室と云ふ久一六世の孫種子命  
 神武天皇に比する云々なりて即位の禮を司り此を

作為一大神の鳴雲と云て天皇に承るハ忠誠のいす  
 云々云々孟軻曰丹牛関子顔淵ハよく徳行をいり  
 と種子命大神の母と云奉一其年教いす云々智  
 云々云々といとも神徳を云一政事を治る奉  
 詳にして且つ盡き其賢云々云々云々云々  
 抑神武天皇日向より撥りて東征一和國<sup>ウチヒ</sup>傷の  
 云々云々云々にして帝即位云々一神武を以て  
 天下を<sup>ナテ</sup>撫育たす云々これを人皇の始と云云子  
 綏靖天皇帝世を継と云云云々云々也種子命宇麻志  
 麻治命等四臣の補翼おも云々云々云々云々編云々



本朝の全書あり

天保壬辰正月日六十八翁南峰散人源雅俊書  
至自序請藩上士小原業夫代筆

中臣被淵源下卷

終

同郡麻宇那村  
頭宮平藏彫刺

中臣被淵源跋

藤野保雅俊老狎乎峰余  
之族黨也近在中正被淵源  
其美善於關此篇之首蘇  
俾讀在知我邦上六神聖御  
極之績々々二曲三謔齋其

中臣被淵源下卷

七一



功化也玩索多年遂成一出其所  
 謂神學者流之說皆以師承乃  
 義此翁之出於獨見於人將斥  
 為狂妄唯以棄之也必矣余不  
 知神學之說安官喙於其間  
 亦哉但恐存峰之見不在人後

焉且讀之由是以得此篇之微旨  
 則狂以達於唐虞精一之訓此篇  
 所未及若亦將以得於此也果然  
 則皇極之要天下果無二道在  
 始可與之耳書成法一語於  
 余、疑以此以冀存峰之不及



於立况諭仍乃益者得於治道  
之淵源云

天保庚寅十一月府学儒爰

萬波俊誠撰并書



# 和漢書籍賣買所

備前岡山庭瀬口  
松嶋屋林助

神書	儒書	佛書	和書	欽書	四書	五經
小學	詩作	詩集	文集	書易	尺牘	石摺
軍學書	連欽	俳諧	季々世	醫書	古法	臨類
將秦經	諸國名所	圖會	節用集	男女用	文章	
字引	俗以	雜書	百人一首	菴功記	心學	俗以
繪手	抄淨經	俗以	過去	臨往來	の品	年代記
深中	淨瑠璃	本諸	妻附	土産	画本	らくすみふで
右	外本	俗以	入元	紙板	行々	体仕
中	留	俗以	俗以	俗以	俗以	俗以
○	其外	俗以	俗以	俗以	俗以	俗以

書林 貞松堂



